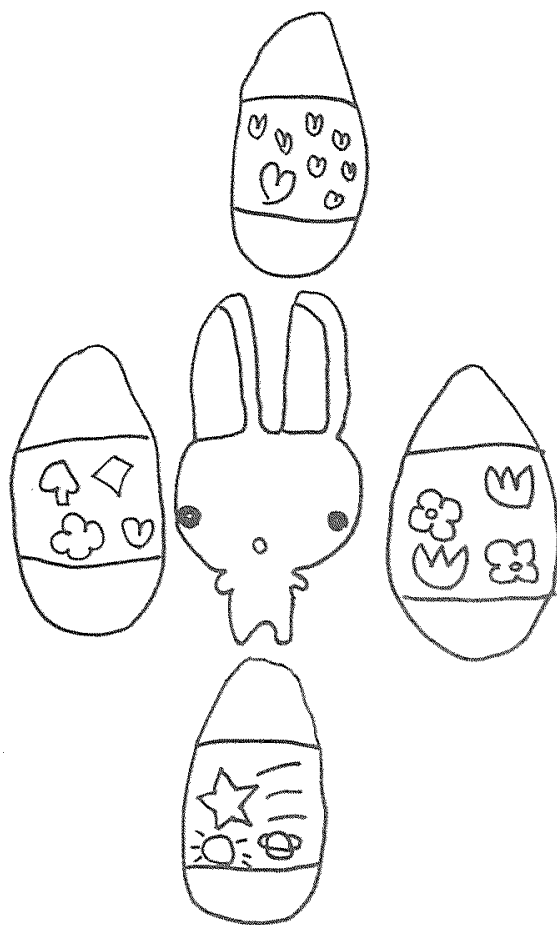


すみよし



Easter

イースター

HaNaMi

2016 イースター号 第198号



聖 句



何事にも時があり
天の下の出来事には
すべて定められた時がある。

コヘレトの言葉

3 章 1-17 節

選：テレジア K. S.





THE JOY OF EASTER

Fr. Constancio Consulta

Christ is risen! and we all cry “alleluia.” Alleluia is an exclamation of joy; in fact, it summarizes a joy that escapes human expression. Everybody loves fairy tales because their endings are happy. Christianity is like a fairy tale because of Christ’s resurrection. We are assured of a happy ending; no matter what suffering and tragedy we carry today, everything will end right. Smiles and laughter would return. Tombs will become empty. The risen Lord reminds us that God has already triumphed over evil and sin, anticipating the happy ending of human history. Just as the Lord rose from the dead, so would we, and death no longer has the last say to our existence. That is why, Easter is joy and we fill our hearts with this joy. May we through our faith, imagine the Lord really present in our midst, exhorting us to maintain our peace and joy, believing that he has conquered all darkness, sin and death. Those who live in the tombs of sorrow, anguish and sickness receive a new and invigorating light from the risen Lord. They must go out and shout “alleluia,” declaring to all that their tombs are empty. May we be able to communicate this joy to everyone. Happy Easter to all!

《イースターの喜び》

コンスタンシオ・コンスルタ神父

キリストは復活されました！そして私たちは「アレルヤ」と声をあげます。アレルヤは歓喜の叫びであり、人間の感情表現が溢れ出る喜びを集約するものです。

人々は皆おとぎ話が好きです。それは幸せな結末を迎えるからです。キリスト教はキリストの蘇りという点でおとぎ話に似ています。私たちはどのような苦しみや悲劇を今日抱えていたとしても幸せな終わりが約束され、全てが正しく終わるのです。微笑みと笑いが戻り、墓は空になります。復活された主は神がすでに悪と罪を打ち破り、人類の歴史の幸福な終わりを予測されていることを私たちに思い出させてくださいます。主が死から復活されたように、私たちもそうなるでしょう。そして死はもはや私たちの存在の終わりではなくなります。それこそがイースターの喜びであり、私たちはこの喜びで満たされるのです。

私たちの信仰を通して、私たちが平和と喜びを持ち続けるように私たちに説いて下さり、あらゆる暗闇と罪、そして死を打ち砕かれたことを信じ、主が私たちの中に現れてくださることを心に思い描くことができますように。悲しみ、苦悩、病の苦しみの中にいる人々は復活された主の新しい励ましの光を受けるでしょう。彼らは出かけ、「アレルヤ」と叫び、皆に墓が空であることを宣言しなければなりません。

この喜びを私たちがすべての人々と分かち合うことができますように。皆さん、イースターおめでとうございます！



[目次](#)



目 次



☆	聖句	テレジア K. S.	・・・	1
☆	巻頭言	コンスルタ神父	・・・	2-3
☆	目次		・・・	4
☆	いつくしみ の特別聖年		・・・	5-7
☆	成人の祝福		・・・	8-9
☆	四旬節黙想会		・・・	10-11
☆	ユスト 高山右近列福祈念ミサ		・・・	12-13
☆	洲本教会 献堂式	A. T.	・・・	14
☆	聖パウロ三木 のお祝い日		・・・	15
☆	ミサ典礼書 の総則に基づく変更箇所について		・・・	16-17
☆	図書コーナー	(サンパウロ) 阿部 真理	・・・	18
☆	(教会日誌・信徒動静)		・・・	
☆	後記		・・・	19

題 字 J. Y.
表紙画 H. Y.

「すみよし電子版」はカトリック住吉教会 HP にフルカラーで掲載されています。

《 いくつしみの特別聖年 》

いくつしみの特別聖年は、2015 年 12 月 8 日「無原罪の聖マリアの祭日」にバチカン、サン・ピエトロ大聖堂の 聖年の扉（Porta Santa）を開ける事で始まり、2016 年 11 月 20 日「王であるキリストの祭日」に終了します。この特別聖年の開催は、1965 年の第 2 バチカン公会議閉幕から 50 周年にあたり、カトリック教会が公会議の実りを生き生きと保ち続けていくという特別の意味を持っています。聖年開催の公式告知として復活祭の次の日曜日、ヨハネ・パウロ 2 世が制定された「神のいくつしみの主日」に、聖年の扉近くで勅書が読み上げられます。

聖年は私たちが神の赦しをいただく年と捉えがちですが、今回教皇フランシスコは「私たちが神の赦しを証しすること」を特に強調され、それはこの聖年のモットー“**Misericordes Sicut Pater**”「いくつしみ深く、御父のように」に表される通りです。教皇はいくつしみの特別聖年を公布した理由を「それは傷を癒すために望ましい時であり、神がそばにいて下さるしるしを目の当たりにし、自分の手で触れたいと待ち望んでいる全ての人に会いに行く事をいとわない時、あらゆる人に赦しと和解への道を示す時です」と語られました。

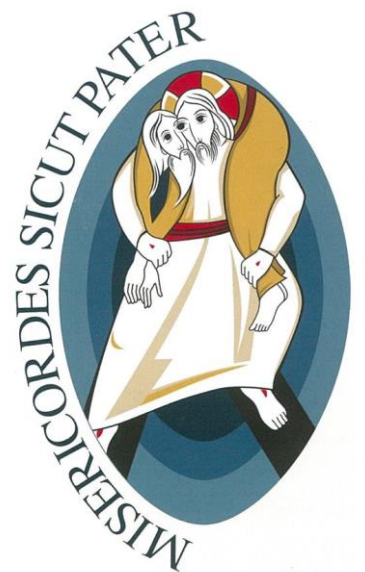
「限りのない神のいくつしみ」は教皇フランシスコが一貫して説かれる大切なテーマで、既にご自身の司教紋章から“**Miserando atque eligendo**”「あわれみ、それを選んだ」という言葉を用いられていますが、今回の特別聖年公布の大勅書「イエス・キリスト、父のいくつしみのみ顔」“**Misericordiae Vultus**”の中でも詳しく説明されています。

教皇は大勅書の最後を以下のように締めくくられます。

「この聖年に、教会が自らを、神の言葉がこだまする場とすることができるよう。神のことばは、ゆるしの、支えの、助けの、愛のことばや行いとして、力強く説得力をもって響きます。教会が、いくつしみを注ぐことを絶やさず、慰めとゆるしをもってつねに忍耐強くいられますように。すべての人の声となり、信頼をもってたゆむことなくこう繰り返せますように。『主よ思い起こしてください。あなたのとこしえのあわれみといくつしみを』（詩編 25・6）」

※いくつしみの特別聖年公布の大勅書「イエス・キリスト、父のいくつしみのみ顔」はこちらからご覧になれます

<http://www.cbcj.catholic.jp/jpn/feature/francis/msg0245.htm>





「イエス・キリスト、父のいつくしみのみ顔」によせる思い



広報メンバー有志

「すべての人が神から必要とされ、愛され、ゆるされていると感じることができますように」
「いつくしみの特別聖年の祈り」より

- ☆ 教皇フランシスコは「イエスはいつくしみという名前を持った神です」と言われます。
神のいつくしみの対象はキリスト教徒だけではなく、すべての宗教に帰依する人たちや罪を犯して今は教会から離れている人たちにも、同じように神の愛（いつくしみ）が注がれ、神の懷にたち帰ってくるすべての人たちをやさしく受け入れて下さるのです。
- ☆ 主のいつくしみについて述べられたこの小冊子は、随所に素晴らしい福音や詩編がちりばめてあり、失われた心の穏やかさを取り戻していただけるように感じます。神は私たちが願い求める時にはいつも助けに来てくださいます。「神よ私を力づけ、急いで助けに来てください。」(詩編 70. 2)
私たちが請い求める助けは、既に私たちに対する神のいつくしみの最初の 1 歩です。
- ☆ 「いつくしみは喜びの源、静けさと平和の泉」
争いの絶えることのないこの世界に向けられた神の御言葉のように感じられます。
私たち一人一人が慈しみの心を大切に日々の生活を送ることができますように。

■ 2 いつくしみー、それは神がそれゆえにわたしたちに会いに来られる、究極の最高の行為です。いつくしみー、それは人生の旅路で出会う兄弟と真摯に向き合うとき、それぞれの心で働く、基本となる法です。いつくしみー、それはわたしたちの罪という限界にかかわらず、いつも愛されているという希望を心にもたらすもので、神と人が一つになる道です。(p6)

■ 12 教会には、神のいつくしみを告げ知らせる使命があります。いつくしみは福音の脈打つ心臓であって、教会がすべての人の心と知性に届けなければならないものです。(p20)

- ☆ 「福音を宣べ伝える」とは、「いつくしみ」を持って周りの方と接することだと改めて気づかれます。しかし、いつもそうあることはむづかしく「いつくしみ」の心を忘れがちになります。私たちが、神様に愛され、いつくしんでいただいていることをいつも心に留め、「いつくしみは福音の脈打つ心臓」(p20)であるならば、私はその末端の毛細血管として「福音」を、神様の「いつくしみの心」を運べる人でありますように。

■ 14 …いつくしみには、神がどのように愛しておられるかを示すしるしがあります。…神は、わたしたちが願い求める時にはいつも助けに来てくださいます。毎日の「教会の祈り」(聖務日課)が次のことばで始まるのはすばらしいことです。「神よ、私を力づけ、急いで助けに来てください」(詩編 70・2)…神の助けとは、ご自分の存在を、それもすぐそばにいてくださることを、感じさせてくださることです。日ごとに神のあわれみに触れることで、わたしたちもまた、皆に対して思いやりある者となることができるのです。(p24)

- ☆ 「教会の祈り」の「神よ、私を力づけ、急いで助けに来てください」のことばは私が大事にしていることばです。今までどれだけ力を頂いたことでしょう。
尽きることのない神のあわれみ、いつくしみに触れて日々の生活の中で、また無関心になりがちな世界的な不安定な苦しい状況に耳を開き目を開けて祈り行動しなければと思います。

- 14 …人生とは旅です。人間は旅人であり、望みの地までの道のりを歩む巡礼者です。…御父がわたしたちにいつくしみ深いかたであるように、わたしたちも他の人に対していつくしみを示す者となるよう努めましょう。…神の裁きを受けたくなければ、だれも兄弟を裁く者になってはなりません。事実、人間は表面的なところにとどまって人を裁きますが、御父は心をごらんになるのです。…裁いたり、罪に定めたりしないということが意味するのは、どんな人にもあるよいところを積極的に受け入れる事、そして一面的な判断や何でも知っているのだという思い上がりによってその人を苦しめるのをゆるさないことです。(p22-23)…わたしたちは神からすでにゆるしを受けたのですから、ゆるしの道具とならないと。…すべての人に対して寛大でありなさい、と。(p24)

☆ 『巡礼者』として私達一人一人が『旅』をしている中で嬉しい時もあれば、苦しい時もあります。心ない言葉や行いを受け不愉快な目にあえばつい感情的になり相手を裁きたくなりますが、人は神の様に全知全能ではないのですから一面的な判断で裁くべきではないと気付かされます。自分自身も反対の立場で裁かれずにゆるされている事もあるはずです。恨んだり、怒ったりするのは心が疲れますが、ゆるすと心が爽やかになります。世界中の人々が寛大ないつくしみの心を持って接してお互いにゆるし合えればもっと平和な世の中になる事でしょう。

- 15…自分とはまったく異なる周縁での生活を送るすべての人に心を開くことです。…偽善と利己主義を隠そうとしてはびこることが多い無関心という壁を、わたしたちがともに壊すことができますように。(p25)

☆ 教皇フランシスコは特別聖年開始に先立つ昨年 11 月 29 日、中央アフリカ共和国の首都バンギでカテドラルの「聖なる扉」を開き、その日バンギが「世界の霊的な首都」になったと告げられました。貧困、災害、報復の連鎖…世界には問題が山積みなのに、どこか他人事のように捉えてきた自分がいます。神のいつくしみに勇気を頂き、心を大きく開き、新しい一步を踏み出す時が「今」だと思います。

- 15 今日の世界には、どれだけ不安定で苦しい状況があることでしょうか。どれだけの傷が、もう声を上げることのできない多くの人の肉体に刻まれていることでしょうか。…侮辱を与えることになる無関心、心を麻痺させて新しいことを求めさせないようにする惰性、破壊をもたらす白けた態度、…世界の悲惨さと、これほど多くの尊厳を奪われた兄弟姉妹の傷をよく見るために、目をひらきましょう。助けを求める彼らの叫びに耳を傾けるよう呼びかけられていることに気づこうではありませんか。…彼らの叫びが、わたしたち自身の叫びとなりますように。(p25)

☆ 最近の教皇フランシスコのTVニュースや新聞記事から、世界中でおこっている悲惨な出来事、逃げ場なくどうしようもない状態に置かれ悲しみ苦しみにあえぐ人々に対し「はらわたのちぎれるような愛情といつくしみ」を注がれているのが伝わってきます。「神よ、わたしを力づけ、急いで助けにきてください」と請い求める人々のそばに主がいつくしみの涙を流しながらおられるように思えてなりません。私達も巡礼の道を歩みながら主のいつくしみにちかづいていけますように。

- 25 教会は、一刻を争うほど緊急に、神のいつくしみを告げる必要性があると強く感じています。(中略)教会は…何よりもいつくしみの真の証人であるよう招かれています。(p44)

☆ 教皇の強いお望みが伝わり私たち一人一人がそれに応えて行くことが出来ますように。

《成人の祝福》

2016 年 1 月 10 日

主の洗礼の主日ミサの中で、傘木神父により 3 人の新成人が祝福を頂きました。
教会の皆に見守られて成長した若者たちに皆様、温かい思いを持たれたことでしょう。



先日は成人のお祝いをしていただきありがとうございました。アルバイトやボランティア活動などで教会に顔が出せていないにも関わらず、皆様が温かい笑顔で素敵なパーティーまで開催して下さいととても嬉しかったです。

私は今子ども達とキャンプなどの野外活動をするボランティア活動をしています。教会学校のキャンプでリーダー達に連れて行ってもらっていた私が、今ではリーダーの一人として同じように子ども達とキャンプをしていると思うと不思議なものです。あの頃は楽しいという感情しかなかったのですが、リーダー側をやっていると正直なところ楽しいというよりは大変です。あの頃、怪我や事故もなく楽しく活動できたのはリーダー達のおかげであると改めて実感しております。リーダーをやっていると「なんで子ども達は言うことを聞いてくれないのだろうか」「片づけもちゃんとやってほしい!」と思ったと同時に、家では私が同じことを両親に言われている立場ではないかと気づきました。リーダー側に立って、周りの大人の方々の大変さや偉大さを知ることができたと同時に言うことを聞かなかった自分を申し訳なく思っています。成人を迎えた今、私を支えてくださった周りの大人の方々への感謝を忘れず自分も今まで大人の方々にしてもらったことを子ども達にできるよう日々精進していきたいと思えます。

S. H.

月日が経つのは想像以上に早く、数年前まで成人という言葉すら他人事と考えていた私ですが、成人式を住吉教会で迎えてからやっと大人の仲間入りをしたのだなと実感しました。成人式では憧れであった振袖を着せてもらい、神父様をはじめとするたくさんの方に祝福をいただき、私の人生の中でとても思い出のある一日になりました。何より幼い時から本当にお世話になってきた住吉教会で無事に成人式を迎えることができたことを嬉しく思います。私が物心ついた時から住吉教会はずっとそばにありました。幼稚園、教会学校、中高生会、主日のミサなどでたくさんの方に支えられここまで至ることができました。本当に感謝しています。この 20 年間、楽しいこと感動したこと、たくさんの発見、学びがあり、またつらいことや悲しいこと、悔しいことなどももちろんありました。そんな中で私をたっぷりの愛情で時には厳しく何よりも私のことを思い考えてくれた両親に感謝の気持ちでいっぱいです。20 年間でいただいた全てのお恵みを大切に、これからの人生は自分が人のために何か役に立てるように生きていきたいです。

A. W.

成人式でのお祝いありがとうございました。とうとう僕は20歳になってしまいました。小学校や中学校、高校と・・・楽しかったことやトラブルを起こしたことなどたまに思い出したりしていますが、はっきりと覚えていたことをやっとなんか忘れようになりました。さて、20歳になってしまったと先ほど書きましたが、僕は後悔の念も含めてこのように書きました。振り返れば振り返るほどああすればよかった、こうすればよかったと思うことがあるのです。あれやこれやと多くの迷惑をかけてきたこともありました。悔いの残ることは必ずあります。今、こうして20歳の自分があるのは悔いを受け止めて生きてきたおかげだと思うのです。これからも僕にとって立ちどころ壁は多いと思いますが、それでも僕は負けたりするつもりはありません。まだまだ未熟者ではありますが、どうぞこれからもよろしくお願いします。

K. H.



緊張と喜びの表情？



手作りのケーキでお祝い



《四旬節黙想会》～出会いは救い～

3 月 6 日 指導司祭 ブラッドリー神父

今回の四旬節の黙想会の準備として、事前に聖書の箇所「ルカによる福音書 19 章 11-19」を読んでおくこと、当日は自分の聖書を持ってくる、とのお知らせがありました。9 時半から「あなたの息を送ってください」の詩編を歌い、黙想会が始まりました。聖書朗読、ブラッドリー神父の講話、その後分かち合い、黙想の後で主日のミサに与るという流れで、御言葉を味わい思いを巡らしました。復活祭にむけてよい心の準備ができました。

～黙想会講話～「ルカによる福音書 19 章 11-19」に沿って

ザアカイの生き方

ユダヤ人で、
アブラハムの子孫

ザアカイとは・・・ユダヤ人でアブラハムの子孫。彼らはアブラハムの子であるということ大切に、神の民であるという民族的な誇りを持ち、精神的な支えとしていた。ザアカイは現実として勝ち組となり生き残るためには「権力」と「お金」を持たなければという堅い信念をもっていた人間。当時の徴税人とは、お金だけを人生の目的にするような恥知らずな人間・・・しかもローマ帝国の徴税人ということはユダヤ人としての誇り・愛国心・信仰も売り渡した人としてみんなに嫌われていた。ザアカイは虚勢を張っていたが、彼の中には、満たされない寂しさがあつたに違いない。

ザアカイの不幸

裕福で.....幸福ではない

裕福ではあつたけれど幸福ではなかった。満たされない思いや痛みが心の奥底にあつた。この世的には成功していたが、神の子供としての喜び・幸せ・生き方を犠牲にしてきた。心の奥底に大きな穴があり、その痛みを無視することはできず、だれか自分を救ってほしいという気持ちを彼は持っていた。その心の表れはイエスさまを見るために「木に登った」という行動に表れる。

イエスとの出会い

イエスの方がザアカイを
探し求める

イエスの方がザアカイを失われた子として捜し求めていた。名前を呼ぶということは特別なこと。名前を呼ばれる側は自分のことを覚えていてくれるという喜びが生まれる。だれも知らないはずの私達の心の深い所を知っていて、やさしく出会ってくださるイエス。（「ザアカイ」という意味は「神は心に留めて下さる」という意味）

ザアカイの新生

新たにされた人間として
生まれ変わる

心の底から新たにされた人間としてあらわされるザアカイ。イエスに出会ったことから価値観や生き方が 180 度変化したザアカイ。「盗む・蓄える」から「返す・配る」へ、「利己主義の孤独」から「分かち合う喜び」へと生き方の方向転換。

イエスは数々の奇跡を行うが、最も偉大な奇跡は人間を心の底から新たに生まれ変わらせること。人間というのは言葉によって動かされるのではなく、感動によって動かされる。木に登って待つザアカイにイエスが友人として語りかけてくれ、ザアカイはそのことに感動した。ザアカイはよいものに出会って心がゆさぶられるという感動を体験する。よい教えやよい導きがあったからといって、よい人間になってよい生活が始まるわけではない。**善いものにであって心が揺さぶられるという感動が必要。それが回心へと導く。**イエスが私たちにあたえてくださるのはその感動。「私を見た者は神を見たのである」・神との出会いという、素晴らしい感動を与えてくださる。どんな人間もキリストとの出会いによって新しい人として生まれ変わることができる。



イエスの使命とは・失われたものを捜し救う。

イエスによれば、ザアカイは失われたもの。「失われる」とは「本来あるべき場所がない」という意味。本来神の民として神の愛と祝福の名に生きる者の一人だったのに、神様の愛から離れ、神の祝福の中からさまよい出た者を、捜し求め見出し、神様の所に連れ帰る、それがキリストの使命。「私が来たのは罪人を招くためである」。

5 節の「ザアカイ、**急いで**降りて来なさい。**今日は**ぜひあなたの家に泊まりたい」。の中の「**急いで**」「**今日は**」は「一刻もはやく今日という日のうちにあなたを救いたい」という気持ちであり「**あなたの家に泊まりたい**」＝「あなたの心に留まりたい」というイエスの気持ちがこめられている。

続くミサの中の説教

良心に負い目があった時、恥ずべき多くのことを行ったときに、おそれずに少し立ち止まってください。あなたを待っている方がいることを考えてみて下さい。その方はあなたを常に心に留めて下さる方です。この方こそがあなたの御父です。あなたを待っている神です。ザアカイと同じように赦しへの望みの木に登ってください。

「ザアカイ、急いで下りてきなさい」。皆さん、私たちもイエスに名を呼んでいただくではありませんか。心の奥底でイエスの御声を聞こうではありませんか。

イエスは言われます。「今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」・・・あなたの心の中に・・・あなたの生活の中に・・・留まりたい・・・わたしたちは喜びを持ってイエスを受け入れようではありませんか。イエスは私たちを作り変え、私たちの石の心を肉の心に変えることができます。わたしたちを利己主義から解放し、私たちの人生を「与える愛の人生」にしてください。イエスにはこのようなことができます。

イエスに癒していただくではありませんか。ザアカイのように、イエスを今日という日のうちにお迎えするものでありたいと願います。

《ユスト高山右近列福祈念ミサ》

2016 年 2 月 7 日(日)

大阪カテドラル聖マリア大聖堂に於いて、ユスト高山右近列福祈念ミサがトマス・アクィナス前田万葉大司教司式により盛大に執り行われました。

当時の田口司教によって進められたユスト高山右近の列福運動は 1963 年 5 月から始まり、53 年の歳月を経ていよいよ列福式を迎えることとなりました。

右近は大名の立場にありながら、富や名誉、権力に勝って神の愛こそが人を幸せにすると確信し、どのような誘い、迫害を受けようとも、またついには祖国を追われてもその信念に生き、遠く日本を離れた地で生涯を閉じました。

時代は大きく変わってもそのメッセージは変わることなく私たちの信仰を強め、福音宣教への力になることを確信します。





閉祭前に聖ファウスティナの聖遺物と聖ヨハネ・パウロ 2 世の聖遺物と「イエスのいつくしみの御絵」の入堂が厳かにありました。（写真下）

御絵はポーランドのクラクフの聖ファウスティナの修道院聖堂にかざられているもので

「JEZU UFAM TOBIE」は「イエスよ、あなたを信頼します」の意味です。

2 月 19 日まで毎日朝 7 時のミサの中で飾られます。以後は全国の教区を回ります。

次の列聖に向けてたくさんのイベントがありますのでご参加とお祈りをお願いいたします。



《洲本教会献堂式》

A. T.

厳寒の時期にもかかわらず穏やかな天候に恵まれた 2 月 6 日（土）13：30 よりカトリック洲本教会献堂式が前田大司教、池長大司教、松浦（謙）神父他 12 名の神父の合計 14 名の司祭団の共同司式で約 120 名の参列の中、晴れやかな雰囲気の中に執り行われました。

献堂式の後、聖堂の横で参列者全員の集合写真を撮り、場所をエクシブ淡路島に移して祝賀会が行われました。席上前田大司教様、神父様方、各教会代表者の挨拶などがあり、阿波踊り「葵連」の踊りで盛り上がり盛況のうちにお開きとなりました。エクシブから洲本教会に戻った時、聖堂内の光を受けたステンドグラスがとても幻想的だったことが印象に残っています。

1957 年に献堂された聖堂は 1995 年の阪神淡路大震災、2004 年の台風 23 号による床上浸水、2013 年の淡路島地震、2014 年の台風 13 号による被害などで柱などが細くなって危険な状態になり今回建て直された次第です。洲本教会信徒の熱意と神戸地区各教会の支援により、第 1 回建設委員会からわずか 1 年ちょっとで献堂されたことは本当に素晴らしく、そのパワーにあやかりたいと思いました。



《聖パウロ三木のお祝い日》

2 月 5 日（金）は日本二十六聖人殉教者の祝日でした。住吉教会では 2 月 7 日（日曜日）に守護の聖人・聖パウロ三木のお祝いをいたしました。

ミサの中でブラッドリー神父は、「聖パウロ三木の最後の説教」を引用されて説教をしめくくられ、皆しばし沈黙のうちに思いを巡らし、祈りました。

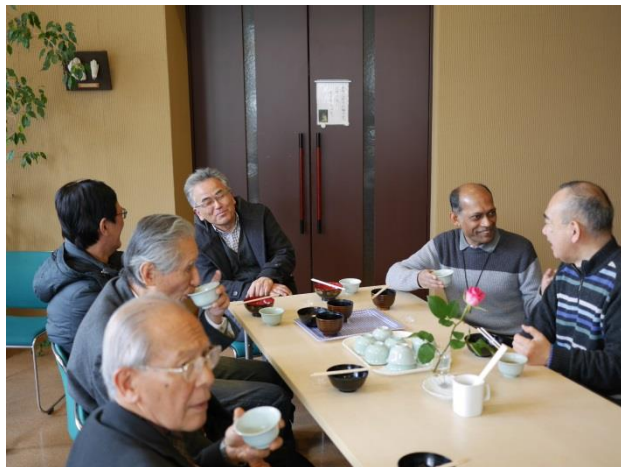
聖パウロ三木の最後の説教

「ここにおいでになるすべての人々よ、私の言うことをお聴き下さい。私はルソンからの者ではなく、れっきとした日本人であってイエズス会のイルマンである。私は何の罪も犯さなかったが、ただ我が主イエス・キリストの教えを説いたから死ぬのである。私はこの理由で死ぬことを喜び、これを神が私に授け給うた大いなる御恵みだと思ふ。今、この時を前にして貴方達を欺こうとは思わないので、人間の救いのためにクリシタンの道以外に他はないと断言し、説明する。」

「クリシタンの教えが敵及び自分に害を加えた人々を許すように教えている故、私は国王（関白）とこの私の死刑に関わったすべての人々を赦す。王に対して憎しみはなく、むしろ彼とすべての日本人がキリスト信者になることを切望する。」（これは、二十六聖人の殉教を直接見聞したフランシスコ会員マルセーロ・デ・リバデネイラが、マニラに追放後書き記したパウロ三木の最後の説教です。）



ミサ後、聖パウロ三木お祝い日恒例のおぜんざいを皆でいただきました。



《新しい「ローマ・ミサ典礼書の総則」に基づく変更箇所について》

2 月 7 日に教区典礼委員会の S. I. さん（神戸中央教会）をお招きして「新しい『ローマ・ミサ典礼書の総則』に基づく変更箇所について」のお話をいただきました。

「カトリック時報」でミサの動作の変更点が連載されたり、昨年末からミサの中の様子が少し変わったりしたことにとまどっていた私たちに、S. I. さんは、変更に至った経緯などをわかりやすくお話してくださいました。講話の中で S. I. さんがお使いになったフリップに沿って、お話をまとめてみました。

（編集部）



S. I. さん 講話:「新しいローマ・ミサ典礼書の総則」に基づく変更箇所について

なぜ今？

何がどう
なっているの？

なんで
変えないと
いけないの？

皆さんの疑問はこの 2 点に集約されると思います。

最初に「なぜ今なんだ？」についてお話しします。

【ミサ典礼書】

ミサは日本全国いや全世界で同じです。それは「ローマ・ミサ典礼書」に基づいてミサを行っているからです。今 使われている典礼書は 40 年前から使われています。でも典礼書は変わらないものではありません。今から 50 年前、第 2 バチカン公会議で大きく変わりました。その前はトリエント公会議後に定められた典礼書を 400 年にわたって使ってきました。見た目は今と大きく異なります。例えば祭壇は壁の方にあり司祭は壁に向き、ラテン語で司式。まじめな信徒はミサの式次第を見ながらミサに与っていました。



第 2 バチカン公会議後、その精神に基づき多くの人々の努力でミサの新しい形が模索され、1970 年「ローマ・ミサ典礼書」が公刊（トリエント公会議からちょうど 400 年目でした）。

その後 1975 年にさまざまな不具合を訂正した「ローマ・ミサ典礼書」第 2 版が出され、1978 年にその日本語版がようやく出ました。それが今使われているものです。

2002 年
第 3 版
ミサ典礼書

それから 30 年間。各国からの実践報告などを受け、ローマは 2002 年に改訂版の第 3 版を出しました。日本でもただちに日本語版作成にとりかかりました。現在、翻訳の 9 割は完了 ローマに提出済みで、返事待ちの状態です。

【典礼書の総則】

さて、この典礼書の最初の部分に「総則」というものがついています。

名前は堅いのですが、これは、典礼書を作った人々のめざす所、こうあってほしいという思いがよくわかる、ミサの動きや意味の明快な解説書になっています。日本の司教団は信徒にもぜひ読んでほしいという思いでこれを別刷りにして出版しました。もちろん、2002 年の第 3 版にもついていて、特にその前の総則では説明不足で誤解されやすかった所などを改訂しています。例えば「祭壇の周りには十字架を置く」とだけ書いてあったのが、新総則では「磔刑像のついた十字架」となっているなど、よりくわしくなっている所が多いように思います。

『ローマ・
ミサ典礼書
の総則』



この新総則を日本の司教団は「ミサの理解が深まる」と判断して、暫定版として出版しました。ただし具体的な動きや言葉が変わる所は、典礼書自体の認可がまだですから、前のままとしました。

それが、2014年5月に「総則」の部分だけが認可されたのです。ということは、動きについては確定したことになります。そこで動きの部分で実行可能なところから始めよう、ということで、今回の変更に至ったという次第です。

[変える理由]

次に、「なんで変えないといけないのか」ということですね。

味わい深いミサ？
ミサって何？
何のためにする？

日本司教団は今回の変更の目的について、「味わい深く 美しいミサを目指すため」と言っています。「味わい深い」…ミサの何を味わうのでしょうか？ そもそもミサって何のためにするのでしょうか？ ミサの目的は？ ヒントは2000年間教会がミサの中で変わらずにやってきたこと。それは「パンを裂く」こと。でもなぜ？ それは、これがイエスさまを一番身近に感じさせる行為だったからです。エマオへ帰ろうとしていた二人の弟子もそうでした。宿屋でイエスさまがパンを裂いた時、その人がイエスさまであることが分かったのです。

イエスを
忘れない
ため

だから、ミサの目的は「イエスを忘れない」ようにすることです。イエスさまが私たちのために苦しみ死んで下さり、復活して下さったことを忘れないために、私たちは日曜日ごとに集まってミサをします。社会で傷つき弱って、イエスの弟子である事を忘れそうになった私たちが、イエスをはっきり思い出し、その体をいただき、強められて再び社会に向かって派遣されていく。典礼はイエスさまをいきいきと心に刻む工夫なのです。

典礼 礼拝を
より深く味わ
うための工夫

例えば、今回の変更部分、「福音朗読の前に十字架のしるしをする」というのは、ことばの祭儀の頂点である福音を聞くことに意識を向けるための工夫です。イエスさまの言葉が肉声で聞こえてくるのですから、しっかりと心に刻みたい、との思いです。

「奉納行列で立たない」というのも、その後のイエスさまをいけにえとして捧げる奉献文に集中するためです。イエスさま自身が捧げられるのであって、私たちが何かを捧げるのが中心ではない。その錯覚を避けるための工夫です。

美しいミサ？
見た目より
心ちやうの？

みんなの動作が揃う事がなぜ求められるのでしょうか？ 見た目より心が大切ではないか？ 心さえ一致していれば、バラバラでも構わないのではないか？

声に 心を
あわせる
(聖ベネディクト)

歌のことで考えてみましょう。なぜ教会ではよく歌うのか？ その一つの目的は心の一致です。聖ベネディクトは味わいのある言葉を残しています。「声に心をあわせる」。逆ではありません。まず声をふさわしく美しくそろえる努力をする。それが実現できた時、心も自然にそろっている。これは人間のことをよくわかった人の知恵だと思います。私たちが一つであることを身をもって知るので。典礼にはこういう知恵が満ちています。

「答唱詩編の詩編部分を一人が歌い、みんなはそれを聞く」これも、一人の声によって語りかけられる言葉を聞きながら黙想して、その後で今日のミサなら「主をたたえよう」と声と心を合わせて神さまに答える、いきいきとしたミサにするための工夫と言えるでしょう。

イエスをもっと
いきいきと感じ
て生きるため

イエスさまをもっといきいきと感じて生きていくために、ミサはあります。現代のミサの典礼は本当に素晴らしいものです。今回の変更も、それをなお一層いきいきとしたものにするためのものです。どうかご理解ください。ありがとうございました。

具体的な変更点等は「カトリック時報」11月号から連載されています。11月号①1月号②2月号③

[目次](#)

《図 書 コー ナー》

ヨゼフ 阿部 真理（聖パウロ修道会）

1. 楽しく学ぶ子どものための「聖書物語」 P・ベルトリニ・グルディーナ絵/M・トーマス文

本書は、この 1 月発行されたばかりの子ども向きの総カラーの本です。旧約から新約までをこの一冊にまとめました。親しみやすい絵が全ページにわたって並んでおり、読む子どもたちが聖書の物語に親しむ助けとなることでしょう。1 ページ 1 話、という形で進められており、サブタイトルの下には聖書の引用箇所が付いています。これによって、自然に、大人の聖書にも導くことができます。この本の紹介文から引用させていただきます。

「この本には、聖書の中から選ばれた 74 の物語が、親しみのもてるかわいらしいイラストとともに、子どもたちに分かりやすく描かれています。旧約時代に始まった人間に対する神さまの愛は、今も続いていることを子どもたちは学ぶことでしょう」

2. 諸聖人の福音

荒木関 巧著

本書は、札幌教区の荒木関神父の著によるものです。著者は、2014 年 4 月に惜しまれつつ帰天されました。著者には、以前よりたくさんの教話、聖書解説などの本があります。特に子どもたちと信徒の信仰教育に対して力を注がれました。この本は、いろいろな使い方のできる本です。まず第 1 章で、ロザリオの祈りを導き、第 2 章では、キリスト教の原点である過越しの神秘の説明、第 3 章では、聖徒の交わりについて説明しています。そして第 4・5・6 章では、マタイ、マルコ、ルカによる福音者を典礼暦の A 年 B 年 C 年に合わせて、日曜日の福音も黙想出来るようになっています。7 章で聖体の秘跡について、8 章では、諸聖人の交わりと女性の役割。9 章は、ヨハネによる福音の解説。というように盛りだくさんの宝が隠されたような本です。少し厚い本ですが、一度手に取ったら手放せなくなるような本。信徒の手引書となることでしょう。

3. 神さまのみこころーイエスさまのたとえを聞くー

稲川 圭三著

本書は、東京教区で長い間、青少年教育、司牧に携わっている稲川圭三神父のシリーズ 4 冊目の著書です。司祭召命を受けるまで、小学校の教師を経験されていたこともあって、この本は、子どもから大人まで本当にやさしく読むことができます。それでいて、しっかりとした内容、簡潔で分かりやすい文章は、初めての信徒の方、そして子どもたちにも理解しやすくなっています。

サブタイトルにもあるように、この本は、聖書のなかの 30 以上ものイエスさまのたとえ話の解説になっています。イエスさまのたとえ話は、イエスさまのみこころとは何かを理解するうえで、とても役に立つことでしょう。そして、この本から、イエスさまが私たちに与えて下さった「神の愛を生きること」を学び、そして私たちが日々出会う人々への宣教に向かう事が出来れば幸いです。

参考までに、著者の既刊の三冊を紹介いたします。

1 冊目は「**神父さまおしえて**」子どもたちの素朴な質問に神父さまがやさしく答えた本。

2 冊目は「**イエスさまといつもいっしょ**」イエスさまの生涯、教会の典礼の事、7 つの秘跡のことをわかりやすく解説した本。

3 冊目は「**365 日全部が神さまの日**」信仰宣言をやさしく解説した本。

※編集部より 上記いずれもサンパウロ刊 住吉教会 2 階図書コーナーでご覧頂けます

[目次](#)

《編 集 後 記》

主の御復活おめでとうございます

前号で新生20年の振り返り記事を書く折に、「すみよし」誌のバックナンバーを読んでいましたら、なつかしい方のお名前や、皆様の若い頃のお姿に出会いました。

また今年は、震災の年に生まれた子供達が成人式を迎えました。

震災の年混乱の中で迎えた復活祭に、ある神父様からいただいたカードに書かれたタゴールの詩「時は去る わたしは待つと愛はいう」という一節を思い出します。

時は流れ、人々の様子は変わりましたが・・・変わらぬ神様の「愛」の心が、住吉教会にはいつもあったと感じる 20 年でした。

東日本大震災から5年、被災地の方々が、神様の愛・人々の愛のうちに希望を持ってお過ごしになられますように、と祈るばかりです。

(H)

今年は復活祭が早かったのも、いつもより少し薄めの「すみよし」です。内容など、いかがでしたでしょうか？ 今号作成にあたり広報チームでは「イエス・キリスト、いつくしみのみ顔」に小文を寄せましたが、私は小冊子を読み進む中で「いつくしみに欠けた自分」に幾度も気づかされ申し訳ない気持ちいっぱい四旬節でした。特別聖年の今年、秋にはマザー・テレサの列聖が予定されています。「私にできないことがあなたにはできます。あなたにできないことが私にはできます。力を合わせれば、きっと素晴らしいことができるでしょう。」マザーの言葉にならい、歩みを進めていきたいと思っています。

(S)

教会案内

ミサ

主日ミサ 日本語	日曜日	9:30
スペイン語	第1・第3土曜日	19:00
週日ミサ	火・金曜日	9:30

講座

信仰講座(Fr.傘木)	Fr.傘木担当日曜日	10:50
信仰の分かち合い	第2・第4日曜日	11:00
聖書の集い Fr.傘木ミサ担当金曜日		10:15
(聖書の集いについて日程は電話でお問合せ下さい)		

Come & See	第4土曜日	15:00
------------	-------	-------

教会学校

第1・第3土曜日 14:00-16:00
(小学校1年生～6年生)

評議会

第3日曜日 11:00

野宿者支援炊出し

第1土曜日 9:30

(住吉教会集合)



「すみよし」第198号

発行日	2016年3月26日
発行責任者	ﾌﾟﾗｯﾄﾌﾘｰ神父/ｺﾝｽﾙ牧神父
編集・印刷・発行	広報チーム
発行所	神戸市東灘区住吉宮町2-18-23 カトリック住吉教会
TEL	078-851-2756
FAX	078-842-3380
http://www.sumiyoshi.catholic.ne.jp	